

電力土木の歴史－第2編 電力土木人物史（その3）

正会員 稲松技術士センター 稲松敏夫（技術士）

History of Electric civil Engineering
-Part II History of electric civil Engineer
by Toshio Inamatsu.

概要

筆者は先に第1回～第11回にわたって、電力土木の変遷と、電力土木に活躍した人々を中心に各河川の水力開発について述べ、その中で電力土木に一生を捧げた人々のうちの代表的人物60名を発掘して、その成果をまとめ得た。

さらに一昨年から、その中25名の人々の業績を詳述し、第2編・電力土木人物史として6名（知久清之助、伊藤令二、北松友義、目黒雄平、高桑鋼一郎、久保田豊）について発表し、今回はその3として数名を発表する。（明治～昭和期、土木、開発した人）

（Ⅰ．分類 人物史 Ⅱ．分類・河川・エネルギー）

1. 人物史

(1) 内海清温



(1) はじめに

昭和60年3月発行の「内海清温」（追想録）によると久保田豊、伊藤剛、伊藤令二、水越達雄、吉田登、市浦繁始め 140名の多くの電力土木界、建設機械化協会、建設コンサルタント協会、土木学会等のかつて内海清温の指導を受けた多くの人々が感概を寄せている。本稿はこれを中心にまとめた。内海清温は、93年の生涯を内務省（4年）水力コンサルタント自営（10年）の後、富士川電力取締役土木部長、日本発送電、建設局長、建設技術研究所、理事長、さらに電源開発総裁、土木学会会長、日本建設機械化協会会長その間、東京大学土木工学科講師（10年）等、電力土木業界、建設コンサルタント協会、さらに大学教育等、生涯を土木技術界への挺身と師弟の育成に、名前の如く清く温かく、時にはきびしく、時には慈父の如く多くの人々の生涯に多大の教訓、指導を興えて、昭和59年3月9日逝去した。

筆者は日本発送電に勤務した間、内海清温は日本発送電建設局長として直接、間接に指導を受けて以来、建設コンサルタント、技術士としていろいろ御指導を受けた。

筆者の内海清温観は、電力界の大先輩として特に、日本技術士会の創立（昭和26年）技術士法の制定（昭和32年）建設コンサルタンツ協会の誕生（昭和38年）建設機械化協会の設立（昭和24年）土木学会会長（昭和32年）等の業績について、清廉潔白な人格と指導力と実行力に頭が下がる。

(ロ) 内海清温の年譜

明治23年12月 鳥取県倉吉市に出生
明治44年7月 第一高等学校卒業
大正4年7月 東京帝国大学土木工学科卒業
大正4年7月 内務省江戸川改修事務所に入省
大正8年9月 内務省退官(4年間)
大正8年9月 電気化学工業(株)朝鮮における発電水力調査業務担当(8年間)
昭和2年11月 水力コンサルタント自営(10年間)
昭和11年2月 東京帝国大学工学部土木工学科講師
(15年間)
昭和12年12月 富士川電力(株)取締役土木部長(2年)
昭和14年12月 日本軽金属(株)取締役電力建設部長
(2年)
昭和16年12月 日本発送電(株)建設局
土木建設部長後に土木局長、建設局長
(3年)
昭和19年9月 工学博士
昭和20年7月 財団法人建設技術研究所長(3年間)
昭和23年10月 財団法人建設技術研究所理事長
(4年間)
昭和24年3月 建設機械化協会副会長後に会長
(20年間)
昭和31年8月 電源開発(株)総裁(2年)
昭和32年6月 土木学会会長
昭和41年5月 土木学会功績賞
昭和59年3月9日 御自宅にて御逝去 享年 93才
昭和59年3月9日 正四位に叙せらる

(ハ) 内務省時代(大正4年7月から4年間)

江戸川分流域頭首工事を担当、同じ内務省東京土木出張所に久保田豊が渡良瀬川改修工事を担当。大正8年内海清温が内務省をやめて、朝鮮関係の仕事をや、また宮崎県の大淀川の電力をやることになったが、久保田豊がその後任として1年間渡良瀬川改修工事を担当して、内務省をやめて或る商社に勤め、天竜川水力を計画することになったが、その企業がつぶれ、内海清温を含む友人達がコンサルタントをやれとすすめるので東京丸の内に久保田工業事務所を開店し内海清温たちは応援してくれ、仕事をあっせんしてくれた由。

(ニ) 電気化学工業(株)時代(大正8年9月から8年間)

朝鮮に於ける発電水力調査のため電気化学工業(株)に入社工務部土木課長となる。

電気化学工業(株)では朝鮮で10万KWの水力発電所を二ヵ所建設する為、内海清温が現地調査をしてみると、悪条件が重なって早急に開発することは不可能である。やむなく時期尚早とのレポートを会社に提出した。

朝鮮を引き上げた後宮崎県の大淀川の水力発電所建設所長として1万5千KWと3万KWの2ヵ所の水力発電所を建設した。大淀川も大正15年に完成したが、1年ほどたって電気化学をやめて、コンサルティング・エンジニアを開業した。

(ホ) 水力コンサルタント自営

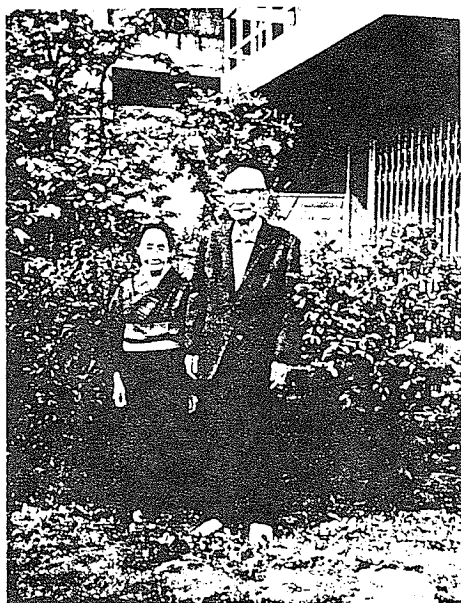
(昭和2年11月から10年間)

青森、宮城、福島 of 全国各県と電力会社(黒部川電力、越後電力、山陽中央水電、雄谷川電力)水道会社(横須賀市、兵庫県阪神上水道調査、大阪府営水道調査、埼玉県水利資源調査)の顧問になった。

この顧問をやりながら、東大、早稲田、日大の講師をや、水力発電工学を講義した。

(ハ) 富士川電力(株)取締役土木部長(2年)日本軽金属(株)取締役電力建設部長(2年)時代、(昭和12年12月から4年間)昭和12年に小林一三の経営している富士川電力(日本軽金属の前身)に入り取締役土木部長として富士川水力発電10万KW建設に、陣頭に立って采配をふるった。満州事変拡大から、高度国防国家体制の確立として、アルミニウム増産のため水力発電所建設は焦眉の急であった。工期2年間、当時の金で1億円使って、これを完成した。この富士川発電の取入口の工事報告で工学博士の学位が授けられた。(砂利層の厚い富士川下流にケーソンを使った取入ダム工事)

(ト) 日本発送電(株)建設局土木建設部長及び、建設局長時代(昭和16年12月から3年間)



昭和53年 先生ご夫妻（自宅のお庭で）

時の日本発送電総裁池尾芳蔵に見込まれて「ぜひ日発にきてくれ」というわけで日発理事建設局長となった。昭和14年は太平洋戦争のはじまる前の風雲急なときであった。アルミニウム、セメント、軍需資材のすべてが電力にかかっていた。戦争を勝たせるための電源開発に内海清温は全力を注ぎ込んだ。

当時、吉田登（関西電力副社長）が内海局長秘書として昭和18年3月から半年間勤めた後、富山県の稱名川水力発電所建設所（出力 7,000KW）に転勤したことや、水越達雄（東京電力常務取締役）が現場の勉強を内海局長に願い出て、北陸水力事務所長 安藤新六の岐阜県打保水力建設所に転勤した等御兩人共筆者が稱名川建設、打保建設の直接の上司としてつかえた事を思うと意義深い。

（f）建設技術研究所長及び建設技術研究所理事長時代
（昭和20年7月から7年間）

建設コンサルタントとして日本での第1号である建設技術研究所を創立し、第1流のコンサルタントとして育て上げた功績は大きい。熊川信之、林栄港、谷田沢正治、梅田昌郎等を育て上げた。

（g）建設機械化協会会長時代（昭和24年から20年間）
建設工事機械化を研究、施工の為に加藤三重次らと共に

設立して日本の建設工事の機械化に全精力をあげると共に、日本国土開発(株)（石上立夫社長）等、工事機械関係業界の指導、育成に努めて成果をあげた。

（h）電源開発(株)総裁（昭和31年8月から2年間）

電発創設後4年を経過した時であり、未だ企業経営基盤の形成途次にあった。戦後復旧の象徴であり、また我が国近代水力土木工事の先駆となった佐久間発電所が総出力35万KWの運転開始をしたのは、内海清温が総裁に就任をして間もない31年9月であった。

その当時、電発は佐久間の開発に引続き、いよいよ奥只見、田子倉、御母衣という空前の大水力開発を開始したが、内海清温は、これらの大規模開発、困難な水力を中心とする建設事業を指揮し、これを成功裡に遂行することによって、電発の企業基礎を揺ぎないものとした。

32年10月完成間もない佐久間ダムに天皇、皇后両陛下の行幸啓を仰がれ、案内にあたった。

（i）東大講師として多くの土木技術者を指導した
（昭和11年2月から15年間）。

畑野 正 （昭和12年3月東大土木卒

電力技研究所理事 内海清温の婿）

生出久也（鹿島建設常務取締役）

石上立夫（日本国土開発社長）等が教え子である。

（j）私の内海清温観

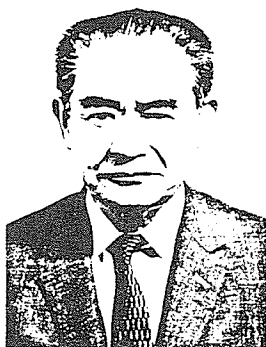
私は昭和17年10月日本発送電(株)北陸水力事務所へ入社した。当時、日本発送電建設局長が内海清温で東部調査課長が熊川信之、西部調査課長が平井弥之助、工事課長が大石勇であった。

私は昭和19年3月稱名川発電所建設所に勤務となったが、本社で内海清温の秘書をしていた吉田登（関西電力副社長）が稱名川第二発電所の工区長として直接の上司であった。

また昭和18年夏打保建設所の勤務となったが、本社で内海清温局長のもとに、打保建設所の土木係長として赴任したのが、水越達雄（東京電力常務取締役）で私の直接の上司であった。吉田登、水越達雄の両氏から内海清温建設局長の話をきいて、きびしいがなかなか思いやりのある人だとの印象を強く受けていた。本社への出

張の際、及び稱名川第二建設所の現地視察にお会いした際、端然とした容姿と仕事についてのきびしい態度と、接すると思いやりのある、温情溢れる若い技術者に対する指導に心打たれた思いであった。140名に及ぶ内海清温の追想録を丹念に讀むにつけ、高潔な人格と温情溢れる部下の指導について、多くの人々が語っているのを讀んで改めて内海清温の偉大さに頭が下がった。

(2) 熊川信之



(イ) はじめに

内海清温（追想録）に熊川信之が書いている“内海清温さんを偲ぶ”という昭和16年から昭和59年の43年間にわたる電力土木界における交友と2代目の建設技術研究所理事長として内海清温の後継者として

熊川信之が昭和30年から平成2年亡くなる迄の建設技術研究所及び日本大ダム会議理事としての活躍と九州電力時代の日本で始めてのアーチダム上椎葉への努力と、さらに田代信雄（九州電力副社長）、野瀬正義（電源開発副総裁）北松友義（東北電力理事）、林栄港（建設技術研究所理事長）、湯浅昭（建設技術研究所副社長）が“電力土木”誌に“熊川信之を偲ぶ”に書いている追悼録を中心に本稿をまとめた。ご子息の熊川正之氏（藤沢市片瀬海岸に居住）には写真等を送っていただいた。

(ロ) 熊川信之の年譜

明治37年 富山県西砺波郡石動町に出生
大正11年3月 第4高等学校卒業
大正14年3月 九州大学土木工学科卒業
大正14年4月 信越電力へ入社
昭和3年 東京発電只見川開発関係担当
昭和10年 東京電灯小野川発電所土木係長
昭和15年 東京電灯秋元発電所建設所長
昭和16年 日本発送電調査担当
昭和17年7月 日本発送電建設局東部調査課長
昭和20年 日本発送電九州支店土木部長
昭和25年 日本発送電建設局土木部長

昭和26年 九州電力取締役土木部長
日本で始めての上椎葉アーチダム工事を企画、建設。

「上椎葉ダムに関する功績」により緒方建設所長と共に、西日本文化章、土木学会賞を受けた。

昭和30年10月 財団法人建設技術研究所に入所昭和41年建設技術研究所理事長就任

昭和55年5月 建設技術研究所理事長退任
（14年間理事長を務めた）

非常勤理事となる。

平成2年2月26日 藤沢市湘南中央病院で逝去

享年87才

(ハ) 東京発電只見川開発担当時代

（昭和3年～昭和10年）

北松友義と共に只見川発電計画担当として、50万KWの大計画に参画した。後北松友義と共に、小野川、秋元の両発電所の建設を完成した。

(ニ) 日本発送電東部調査課長時代

（昭和17年～昭和20年）

建設局長 内海清温、東部調査課長 熊川信之、西部調査課長 平井弥之助、工事課長 大石勇のメンバーで、水力開発34万KWの建設、調査に努力した。野瀬正義（電源開発副総裁）が当時熊川信之西部調査課長の下に係長となって、ともに調査に努力した。

(ホ) 九州電力取締役土木部長時代

（昭和26年～昭和30年）

日本で始めての上椎葉アーチダムを企画、建設に努力した。上椎葉ダムは、昭和2年9月着工、不運にも29年9月台風に痛い水害を受けたが、30年5月営業運転に入った。

上椎葉ダムは高さ110mの我が国初めてのアーチダムで出力は90,000KWである。

(ヘ) 建設技術研究所時代

（昭和30年10月～昭和55年5月）

25年にわたり建設技術研究所に勤務し、その中昭和41年より14年間理事長として、日本での指導的コンサルタ

ントとしての育成に努力した。特に国内はもとより、海外のダム総合計画、河川総合開発調査に技術力を発揮した功績は大きい。特にシリア、ユーフラテス総合開発調査やフィリピン、マリキナ河総合開発計画（高さ 200 mの多目的アーチダム）後年大ダム会議幹事として国際大ダム会議への論文発表等70才を越した技術者としての研究論文は、世界でも珍しく、高く評価された。

(1) 私の熊川信之観

日本発送電及び建設技術研究所時代、筆者は何回か熊川信之にお会いした。さらに田代信雄、野瀬正儀、北松友義、林栄港、湯浅昭の想い出を讀んで、長年にわたる電力土木界への献身と、特に日本で初めての上椎葉アーチダムへの熱意と70才をこえても国際大ダム会議へ参加して論文を発表し、世界の権威者と技術討論をかわすという執念については頭が下がる。大いに見習いたいと思う。

(3) 岩本常次



(4) はじめに

大橋康次氏（元北海道電力副社長）の“電力土木”誌の岩本常次さんのご逝去を悼んでを讀んで、本稿をまとめた。北海道電力で長年にわたり岩本常次社長とともに歩んで來られた大橋康次氏の追悼録を讀んで岩本常次の生涯に頭が下がる思いである。

(a) 岩本常次の年譜

明治36年	兵庫県明石市に出生
昭和2年	東京大学土木工学科卒業
昭和2年	上毛電力入社
昭和16年	日本発送電入社 本社及び九州勤務
昭和18年	日本発送電四国支店 四国分水第4、第5黒川の2水力 発電所の建設担当

昭和22年	日本発送電北海道支店土木部長
昭和26年5月	北海道電力土木部長
昭和31年	北海道電力取締役 爾後 常務取締役、副社長を経て
昭和41年	北海道電力社長
昭和49年	北海道電力会長 北海道経済連合会初代会長 北海道開発審議会長
昭和55年	勲一等瑞宝章授与
平成5年10月8日	逝去 享年90才 從3位に叙せられる

(ハ) 上毛電力時代（昭和2年～昭和16年）

東大時代の恩師物部長穂博士が完成された耐震構造理論を適用した本邦初の本格的扶壁式コンクリートダムである丸沼ダム（群馬県）の設計と現場の指揮をとったのが、岩本常次の電力界における初仕事であった。その後同社において一の瀬、丸沼、栓の滝の3発電所の建設を担当した。

(ニ) 日本発送電四国支店時代（昭和18年～昭和22年）

永田年（後の北電副社長、電発佐久間ダム所長）の下で四国高知県の分水第4、第5黒川の2水力発電所の建設を担当した。

(ホ) 日本発送電北海道支店土木部長時代

（昭和22年～昭和26年）

北海道電力土木部長時代

（昭和26年～昭和31年）

永田年（当時日発北海道支店長）、藤波収（北電社長、後の電発総裁）の下で久保内、蘭越、班溪、然別川系3発電所、層雲峡など本道各地の水力電源拡充を日夜を分たぬ突貫工事で進め、その陣頭指揮をとった。これら電源の拡充により昭和28年に北電は全国各社に先駆けて電力制限の解除を行った。一方戦後に立案計画された然別川系、日高水系、十勝川水系の水力地点調査には、岩本部長自ら度々これら道内奥地の熊の出没する地帯の調査隊の励ましに出かけた。

(ハ) 北海道電力社長時代（昭和41年～昭和49年）

会社の最高責任者として社運を賭けて水力電源の日高一貫計画、反対運動の激しかった伊達火力、また泊原子力などの大型電源を次々に推進するなど北海道電力の発展に多大の貢献をした。

(ト) 北海道電力会長、北海道経済連合会初代会長、北海道開発審議会会長時代（昭和49年～昭和55年）

産業界から文化分野まで、幅広く各界の発展に盡した。これらの長年に亘る功績が認められ、昭和55年には勲一等瑞宝章を授与され、今回の逝去に際し従3位に叙せられた。

(フ) 私の岩本常次観

大橋康次氏（私が昭和17年日本発送電北陸水力事務所入社当時の直属上司・以後現在までお世話になっている）を北海道に数回お訪ねしたがその折、岩本常次のことをよく聞かされた。

「誠心誠意」の小学校時代の最も尊敬する先生から教わった教訓を生涯のモットーとし、日常生活、また仕事の上でも誠実に物事に当る事を実践した方で、このことが大橋康次等にとり岩本常次の無言の大きな指導、教訓であったとの事である。

(4) 吉田登



(イ) はじめに

筆者と吉田登の出会いは昭和19年3月富山市の日本発送電北陸水力事務所から称名川第二発電所建設所に転動した時に、同時に日本発送電東京本社内海建設局長の秘書をしていた吉田登が現場勤務を内海局長に申し出て称名川第二発電所建設所工区長として、私の直属の上司となった時である。爾後、昭和20年4月日本発送電特殊建設隊一心隊長（新潟県日曹工場）として吉田登が赴任した時も設計係長として私が同行し、工事完了して昭和21年1月日本発送電北陸支店水路課係長、爾後昭和26年5月関西電力建設部土木課長として吉田登が大

阪に赴任する迄日本発送電北陸支店に直属の上司として7年間私は吉田登の指導を受けた。私は昭和26年北陸電力に入ったが年に数回お会いする機会を得た。

“電力土木”誌に近藤信昭（関西電力常務取締役）の“故吉田登を偲ぶ”の追悼録と筆者の思い出を中心に本稿を纏めた。

(ロ) 吉田登の年譜と業績

大正元年	鳥取県に出生
昭和12年3月	東京帝国大学土木工学科卒業
昭和12年4月	東京電灯(株)入社
昭和16年4月	日本発送電(株)に移籍（兵役中）
昭和18年4月	日本発送電(株)建設局勤務 内海建設局長秘書
昭和19年3月	日本発送電(株)北陸水力事業所称名川第二発電所建設所工区長
昭和20年4月	日本発送電(株)特殊建設隊一心隊長 （新潟県二本木、日曹工場）
昭和21年1月	日本発送電(株)北陸支店土木部水路課係長
昭和25年4月	日本発送電(株)北陸支店庄川成出水力発電所建設所土木課長
昭和26年5月	関西電力(株)建設部土木課長 爾後建設部長、取締役建設部長、常務取締役、副社長

その間、黒四ダム発電所の開発には調査計画段階から工事完成に至るまで終始中枢部の責任者として挺身され、自ら数多くのアイデアをもって、技術陣を指導し幾多の困難を克服して完成に導かれた功績は多大である。

昭和37年	東京大学から工学博士授与 「航空写真による地質調査」 （黒四開発を通じて得られた）
昭和40年代	揚水発電所計画
昭和45年	我が国初の大容量純揚水発電所として喜撰山発電所を完成、続いて奥多々良木発電所、奥吉野発電所と最大級の揚水発電所を次々と完成された。

これらの開発を通じてロックフ
ィルダムのアスファルト表面遮水
壁の採用、水圧鉄管へのHT、80
級高張力鋼の採用等多くの新技術
の開発導入の指導にあたった。さ
らに原子力開発の黎明期以来、構
造物の耐震対策、安全対策の確立
や我が国初の外海での人工島とし
て注目を集めた御坊火力発電所の
建設をはじめ、電源開発史上に残
した輝かしい功績は枚挙にいとま
がない。学究の〇として、国際岩
の力学会の副総裁を8年に亘って
務め、岩の力学分野の進歩に貴重
な貢献をした。

昭和58年10月 動力炉、核燃料開発事業団の理事
長（第4代）

我が国エネルギー問題の解決に
最も重要課題である核燃料サイク
ルを確立するための国家的事業に
身を投じ、最高責任者として経営
にあたった。

「同事業団で蓄積された自主技
術の実用化の推進」

「高速増殖炉〇炉—もんじゅ—
建設の本格着工とその推進」

「放射性廃棄物の処理、処分の
研究開発の推進」等を解決した。

昭和61年11月 勲2等旭日重光章授章

昭和62年3月10日 関西電力病院で逝去

享年74才

正4位を贈らる。

(ハ) 私の吉田登観

昭和19年3月 稱名川第2発電所建設所で直上司として初
対面以来、一心建設隊及び日本発送電北陸支店の7年間
直接指導を受けた私自身の体験とその後36年に亘る関西
電力幹部、動力炉、核燃料開発事業団の理事長としての
業績の中で特に私が吉田登についての感慨をあげると次
の3点である。

(1) 冷静、沈着に思考を重ねると共に、一旦決意すると

率先垂範、陣頭指揮に立ち、果敢に行動する。所謂“熟
慮断行”これは、学生時代東大囲碁部の主将としてはげ
まれ、その後日本棋院六段の腕前で並居る天狗連中の鼻
を明かすなど数々の逸話を残された、囲碁で鍛えた大局
を見る眼は業務遂行にあたって如何なく発揮され、豊
かな行動力とそれを裏付ける事前の布石のすばらしさは、
容易に真似ることの出来ないコンビネーションだと思う。
(2) 内海清温追想録に吉田登が「秘書として」と書いて
いるが、2度目の召集が解除になり、無事に満州から帰
って来たのが昭和18年の春でした。昭和12年に東電に入
社したのですが2度目の召集中に本人の承諾もなく日発
に移籍されていたので、日発時代の土木課に配属され勤
務することになった。昭和18年から昭和19年の初め頃ま
で、内海建設局長の秘書として勤めた。

秘書として勤務中、一度水力発電所の建設現場を経験
しなければ水力技術者としての資格がないと思ったので、
内海局長に建設現場への希望を申し出たところ内海局長
の状況判断の上で総合判断で私の願いを聞いて戴き、転
勤を許可するという決断をして戴いた。富山県のへき地
であり、出力7,000KWという小規模の水力発電所（稱名
川第2）であったので何故秘書をやめてまでその様な処
に行く気になったのか、又内海局長にこれを認めて貰う
ことになったのか、思い出せば不思議な気がする。しか
し、この内海局長の決断が私のその後の人生の道を決め
たものであり、忘れることのできない私の人生の恩人な
のです。と、吉田登が書いているがこの稱名川第二発電
所の現場で私が出会ったわけです。発電所担当の私の直
上司として、工区長として指導をうけ、つづいて一心建
設隊日本発送電北陸支店水路課と7年にわたり直上司と
して指導を受け、公私ともにお世話になったが“熟慮断
行”と先への見通しを含めた計画、調査、設計、工事へ
の検討という点で吉田登の指導を心から有難く思ってい
る。

(3) 吉田登は性重厚闊達にして緻密明敏、人格極めて高
潔円満な人だったと近藤信昭氏が書いている如く私も長
年のつきあいで吉田登の人格にふれて若い時代に直接上
司として指導を受けた事は、私の人生の上で大きな感化
を受ける事が出来て大変有難いと思っている。

(5) 水越達雄

(1) はじめに



筆者と水越達雄の出会いは昭和18年夏日本発送電北陸水力事務所（富山市）の打保水力発電所建設所（岐阜県河合村打保）へ調査、設計に行っていた時、本店建設局工事課から水越達雄が打保水力発電所建設所土木係長として赴任した時からである。爾後水越達雄は東京電力へ私は北陸電力へと勤めは別れたが年に2～3回電力技術土木協会や土木学会の会合等でお会いして、52年間の交友となる。

“電力土木”誌に佐藤友光氏（東光電気取締役社長）の“水越達雄氏を偲ぶ”の追悼録と“土木学会”誌に石井清氏（東京電力常務取締役）の“水越達雄氏を偲んで”の追悼録と筆者の思い出を中心に本稿を纏めた。

(2) 水越達雄の年譜と業績

- 明治44年 東京で出生
- 昭和11年3月 東京帝国大学土木工学科卒業
- 昭和11年4月 大日本電力㈱に入社
 - 鳥海山麓の子吉川（秋田県）の水力開発で電力土木人生の第一歩を踏み出した。アーチ型コンクリート水路橋の設計施工が最初の仕事だった。
- 昭和14年4月 日本発送電㈱入社
 - 只見川水系宮下発電所などの調査設計を担当する。
 - 昭和17年から18年にかけて南方派遣団員（団長畠山好伸氏）として、セレベス島方面の電源調査に従事する。
 - 帰国後昭和18年6月日本発送電北陸水力事務所（富山）打保発電所建設所（岐阜県河合村打保）土木係長として赴任。戦時下の資材不足で工事は中止。（打保発電所は関西電力で昭和30年完成）（内海清温追悼録に水越達雄が書いているが内海局長にダム現場に出して欲しいとお願いし

た所安藤新六の北陸水力事務所の打保水力に転動することになったとある。）

- 昭和20年1月 特殊建設部隊「刀水隊長」（海軍囑託、群馬県後閑、中島飛行機地下工場の建設）
- 昭和21年1月 日本発送電、関東支店土木部水路課長として、戦時中に酷使した施設の修復のため関東周辺の奥地を東奔西走、陣頭指揮をとった。
- 昭和26年5月 電力再編成で東京電力㈱に移籍。建設部発電計画課長として、戦後復興のための最大使命であった水力発電の立地に取り組んだ。
 - 昭和27年から28年にかけて奥利根や信濃川水系犀川筋などで次々と着工にこぎつけ、また只見川開発に伴う水利権の交渉にも心労した。
 - 米国、カナダに赴き、アルカン、プロジェクトやベアリバーダム等における新技術、新工法に着目し須田貝における地下式発電所の採用やダム、コンクリートへのフライアッシュの使用、野反ダムにおけるコンクリート、フェーシングの採用等を指揮した。
- 昭和28年 建設部土木課長
- 昭和35年 鬼怒川水力建設準備事務所長
 - （4 発電出力20万KW）
- 昭和36年 建設部長
- 昭和39年 取締役建設部長
 - 梓川再開計画（3 発電所90万KW）では梓川水力建設副本部長として昭和41年より3年余現地に駐在して建設の総指揮をとり、国道沿いに3つのアーチダム（高さ155m, 95.5 m, 60m）を設置する2段階揚水方式の難工事を完成した。
- 昭和46年 常務取締役
 - 高瀬川水力建設本部長担務（2 発電所 132万KW）の総指揮をとった。

高さ176mと125mの2つのフィルタイ
プダムを設置する1段階揚水方式の
建設の現地の指揮をとった。



在りし日の水越達雄さん(右)。宮野綾子
さんと高瀬川で。

昭和49年 送变电建設本部長担務
東京湾内に相次いで建設された新
鋭火力群、さらに湾外の遠隔地火力
群の土木、建設分野も担務した。

昭和41年 工学博士号授与
(温度変化に起因するコンクリート
ダムの挙動に関する研究)

昭和49年 藍綬褒章授与
昭和52年 土木学会会長
岩の力学連合会理事長
日本コンクリート工学協会会長
電力土木技術協会副会長

昭和52年 東京電力最高顧問
常磐共同火力(株)社長
平成3年 東京電力顧問
常磐共同火力(株)顧問

平成6年6月12日 逝去 享年83才

(3) 私の水越達雄観

昭和18年夏打保発電所建設所で初めてお会いしてから
51年の間直接、間接ご指導をいただき緻密にしてにして
寛仁、何事にも綿密かつ果敢に取り組まれ行動力に溢れ、
明治の気骨を今に伝えるお人柄と同時に、誠に温厚なご
性格で多くの同僚、後輩の信望を集め信望を受けたひと
りとして水越達雄の生涯を今まとめていて頭が下がる
共に指導を受けた一人として身の幸いを痛感する。

(6) 市浦繁

(1) はじめに

通産省時代の指導とともに昭和32年から39年まで
北陸電力建設部次長、企画室長、建設部長として有
峰ダムその他筆者の直接上司として指導を受けた経
験と“電力土木”誌に野瀬正儀氏(日本大ダム会議
会長)が書かれた“市浦繁氏のご逝去をいたむ”の
追悼文を中心に本稿をまとめた。

(2) 市浦繁の年譜と業績

大正元年 東京都に出生
昭和10年3月 東京帝国大学土木工学科卒業
昭和10年4月 大同電力(株)に入社
木曽川筋兼山水力発電所の建設従
事したのが電力業界に足を踏み入
れた最初である。
昭和13年 電力国家管理のため大同電力を辞
任し、通信省電力国家管理準備局
に入り、役人生活を始めた。
その後第2次世界大戦がし烈とな
陸軍に徴収され、旧満州の築城部
隊に於いて活躍した。

昭和20年終戦と共に内地に帰還する。公益事業委
員会がGHQの指導の下に設立され、勤務した。

米国電気事業団の一員として、大ダム大水力発
電所の建設運営を視察する。

昭和26年日本発送電(株)が解散。9電力会社となっ
て市浦繁は、公益事業委員会開発課長として、新
電力会社の建設工事の許認可、電気料金の改訂等
仕事に携わった。

昭和31年 通産省官房審議官

昭和32年4月 北陸電力に入社。
建設部次長、企画室長、土木部
長を歴任、土木部長の時は有峰
水力建設工事をも指導する事と
なった。

昭和39年には北陸電力在籍のまま国連アジア
極東経済委員会(ECAFE)上級職員となっ
て、メコン河総合開発計画調査に従事。

昭和45年にECAFEを退職し、バンコクから
引き揚げる。

昭和46年から昭和51年迄日本工営(株)、清水建設

休顧問。

昭和51年より日本大ダム会議専務理事となり13年6ヵ月の間特に国際大ダム会議の仕事に従事。その間大ダム会議総会に毎年出席して皆勤の実績をあげた。

1982年より1985年の3年間国際大ダム会議副総裁。

昭和55年 勲四等瑞宝章叙勲

平成元年9月14日 逝去 享年79才

(3) 私の市浦繁観

昭和32年から39年まで7年間直接北陸電力土木部の上司として指導をうけた。有峰ダム、九頭竜川水力建設工事、富山火力発電所工事の設計、工事施工について多大のアドバイスを受けた。特に通産省の幹部として、各電力会社の指導者としての技術特にダム、発電所の新技術についての指導が今でも私の技術の中に生きていると有難い感じである。また冬はスキー、それ以外はゴルフと明るいスポーツマンと明朗な人なつこい話し振りがいまでも耳に残っている。

(7) 参考文献

- 1) 内海清温先生追想録 昭和60年3月発行
- 2) “電力土木”誌追想録
- 3) 土木学会誌追想録

(以 上)